



観光地点検

奈良県立大学地域創造学部講師

岡本 健

コンテンツ学会とイベント融合 アニメファンに富山をアピール

研究者や大学を観光振興に活用したい自治体は多い。私のような若手の教員ですら、様々な地域から講演依頼をいただいたり、アドバイスを求められる。ただ、その地域をよく知らない立場での発言となる場合もあり、きちんと役に立っているのか不安になることもある。研究者を呼んで講演や会議を実施してみたが、どうにも生かしきれない、そんな思いを持つ方々が多いのではないだろうか。

イベントやライブを開く

今回は、学会を開催しつつ、イベントやライブを実施し、研究者チームでフィールドワークを行う試みを実施した取り組みに注目してみたい。

2014年9月7日(日)、富山市の富山国際会議場では、コンテンツ・ツーリズム研究学会が開かれた。学会の会長である清家彰敏氏(富山大学教授)が会長挨拶。次に、増本貴士氏(尾道市立大学特任准教授)が学会設立の趣旨説明をした。続いて、基調講演が二本。一つ目は筆者による「コンテンツ・ツーリズムとは何か?」。二つ目



トーク&ミニライブの参加者はアンケートに回答

は清家氏の「コンテンツ・ツーリズムによる富山県の経済効果と産業誘致」。そして、増本氏による研究報告「尾道市における漫画・アニメ聖地巡礼産業の可能性」が続いた。

休憩をはさみパネルディスカッション「コンテンツ・ツーリズムと産学官での産業誘致を中心として」が実施された。県や市の職員、地元のメディア産業や宿泊産業の関係者らが地元富山の可能性について話し合った。

のべ1600人のファンが参加

学会会場では、富山県高岡市をPRするキャラクターあみたん娘(TR@P実行委員会)や、富山県南砺市に行かなければ見られないアニメ『恋旅』(南砺

市交流観光まちづくり課、P.A.WORKS)などのブースなどが並び、グッズを販売するとともに地域コンテンツをPRした。

さらに、同会場では、富山県を舞台にしたアニメ『ゆるゆり』(©なもり/一迅社・七森中ごらく部)の主要キャラクター4人の声優のトーク&ミニライブイベントが開かれた。二回講演で、延べ1600人がイベントに参加した。イベントでは、声優たちが富山の名産品をネタにトークするコーナーや、新曲のライブなどがあった。

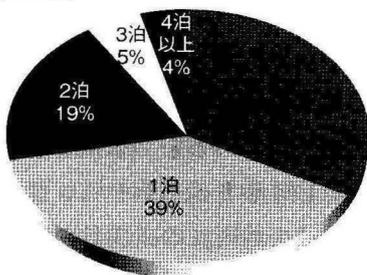
実は、コンテンツ・ツーリズム研究学会では、実証研究と現地調査を同時に進めていた。実証研究は、「ゆるゆりトーク&ミ

ニライブ」の開催だ。声優イベントの主催はコンテンツ・ツーリズム研究会実行委員会なのだ。ライブ参加者にはアンケート用紙が配られ、データを得た。アンケートの回収数は約600で回収率は37%程度だった。

首都圏から4割参加

参加者がどこから訪れたかを聞いたところ、県別で最も多いのが富山県の2割。東京都、神奈川県、愛知県、埼玉県、千葉県などが続き、首都圏合計で4割程度を占めた。旅行日程については、1泊が最も多く39%、次いで日帰り（0泊）が33%、2泊が19%、3泊が5%、4泊以上が4%だった（図）。参加者の支出推定額は1800万円と経済効果も測定できた。ちなみに、首都圏および新幹線沿線参加者の平均支出額は1万3000円であった。

図 参加者の旅行日程



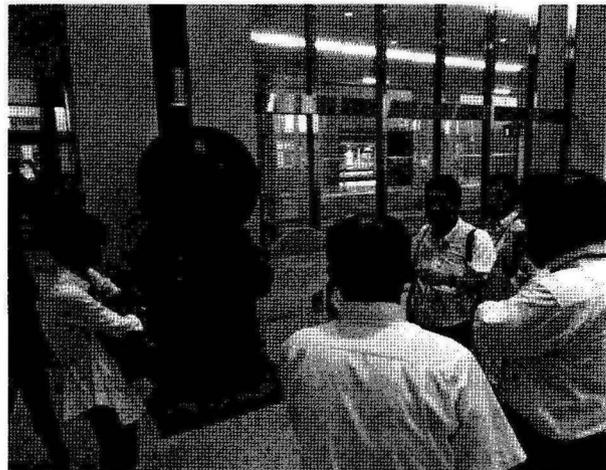
今回のイベントは富山での開催にも関わらず、首都圏からの誘客を促し、宿泊者数も増やしている。現在、このアンケート調査の詳細を分析中で、その成果を報告書にまとめている。

また、富山のコンテンツ・ツ

ーリズム関連資源を研究者や学生が見て回るフィールドワークも実施された。学会前日の9月6日には、高志の国文学館を訪ねて展示を見学し、高岡市のあみたん娘について、TR@P実

行委員会のメンバーにインタビュー、ドラえもんトラムを体験し、ドラえもんポストやキャラクターの像を見学し、トラムを走らせている万葉線株式会社を訪問した。また、学会翌日の9月8日には、株式会社ピーエーワークス（アニメ制作会社）の菊池宣広専務取締役インタビューした。

学会では講演だけではなく、



フィールドワークを行う研究者と学生

イベントを主催して、量的なアンケート調査と、質的なフィールドワーク調査を、経済学、経営学、観光学、社会学といった専門分野の異なる研究者が共同で実施した。様々な分野の研究者が一堂に会して、その地域について議論をすれば、地域にとっても有用なアイデアが得られ、研究者にとっても研究を進めて行く機会となる。

今後のポイント

今回の学会の開催は、地元富山の事業者や行政、大学なくしてはできなかった。観光振興について、外部の専門家や学生を呼んで「なんとかしてもらおう」という意識の自治体が多い中、富山市では、行政や民間が学会誘致を貴重な機会と捉えて、研究者に講演だけではなく、様々な機会を提供してくれた。観光研究者としても、大変貴重なデータをいただけたと感じている。この成果は引き続き地域に還

元していく予定だ。

観光振興やそのためのアイデアは、金や時間などのコストをかけずに生まれてくるものではない。近年、大学でも地域連携、産学連携が叫ばれてはいるが、研究者は無料のコンサルタントではないし、学生は無償で使える労働力では決して無い。

研究、教育と実践が、共に成立するような形での連携のあり方をこれからも模索していかねばならない。